

指導資料



鹿児島県総合教育センター

特別支援教育 第165号

— 幼、小、中、特別支援学校対象 —

平成24年4月発行

教師の関わりに視点を当てた 子どものコミュニケーション指導

「Aさんに話し掛けても、やり取りがうまく続かない。」、「Bさんは、音楽が聞こえると笑ったり、体を動かしたりするけれども、自分から要求のサインを出せるようにするにはどうしたらいいのだろう。」など、障害のある子どもとのコミュニケーション場面で、教師が戸惑うことは少なくない。

本稿では、コミュニケーションを「話し手と聞き手との間に起こる伝達のプロセス」と捉え、コミュニケーションの一方の担い手である大人の関わりに注目するインリアル・アプローチ（以下、インリアル）を取り入れた、初期のコミュニケーション段階につまずきのある子どもへの指導について述べる。

1 「インリアル」とは

インリアル（INREAL）は、Inter Reactive Learning and Communicationの略で、米国コロラド大学のワイズ（Weiss,R.）らによって開発されたコミュニケーション指導の一つの方法である。インリアルは、大人が子どものサインをうまく読み取り、適切に反応していくことで、子どもの話そうという意欲や自分もっている伝達手段で相手と通じ合えるという自信を育てていこうとするものである。そのために、子どもと大人の遊びや会話場面などをビデオ録画し、子

どもはどんな方法で何を伝えようとしていたのか、大人はどのように反応したかなどを検討する。このような方法を通して、インリアルでは、大人のコミュニケーション感度を高めることをねらっている（「指導資料 特別支援教育 第125号」参照）。

2 コミュニケーションの四つの段階

インリアルでは、表情や身振り、言葉などにより表現した、子どもの「伝達意図」を、大人が的確に読み取り、反応的に関わることで、子どもがコミュニケーションの成功体験を重ねていくことを大切にする。

インリアルを日本に導入した竹田ら（1994, 2005）は、「伝達意図」の発達を研究したベイツ（Bates,E.）の考え方を取り入れ、コミュニケーションの発達を四つの段階に整理している（表1）。

表1 コミュニケーションの四つの段階

聞き手効果段階：生後すぐから10カ月頃まで 意図は聞き手（大人）によって解釈される
意図的伝達段階：10カ月～1歳頃に始まる 意図を行為で伝えられるようになる
命題伝達段階：1歳～1歳4カ月頃に始まる ことばで伝えられるようになる
文と会話段階：1歳半～2歳頃に始まる 文での表現が始まり、3歳頃から大人の会話スタイルに近づく ※月齢は健常発達のためやす

(1) 竹田契一監修、里見恵子他著『実践インリアル・アプローチ事例集』平成17年 日本文化科学社 P.23から引用)

このような考え方を参考に、今、子どもがどの段階にあり、課題は何かを理解することは、働き掛けを行う際の大きな手掛かりとなる。今回は、「聞き手効果段階」と「意図的伝達段階」の子どもの指導について、焦点を当ててみていくことにする。

3 聞き手効果段階の子ども

(1) 特徴 (0～10か月)

大人が子どもの様子から子どもの気持ちやしたいことを読み取り、関わることで、やり取りが成立する段階

(2) 関わりのポイント

【前期：0～6か月】

① 人への意識を育てることから始める。そのため、子どもがどのような遊びをしたときに快反応を示すかを見付ける。

くすぐると笑う、歌を歌うと声を出す、揺らすと手や足を動かすなど、その子どもなりの快反応を細かに見付ける。坂口(2007)は、重い障害のある子どもの場合、呼吸や身体の緊張などもみていく必要があると指摘する。

② 快反応につながる体を使った感覚遊びや簡単なやり取り遊びなどを設定する。

子どもの認知の発達を考慮して、関わる際の遊びを設定することが大切である。この段階では、例えば「高い高い」や「ぐるぐる回し」、「揺らし遊び」などの感覚遊びや、簡単なやり取りを含む「いないいないばー遊び」などが考えられる。遊びの最後に「1, 2, 3」とタイミングよく高く抱き上げたり、子どもの期待を引き出すように「ばー」と顔を出したりなど、雰囲気やリズム、抑揚などの言葉の周辺要素も意識する。

③ 自分のどのような行動が、大人に反応を起こさせているのかに気付かせる。

例えば、タオルブランコが終わって子どもが足を動かした後に、またタオルブランコを始めるとする。このとき、始める前に、子どもが動かした足を大人が触ることで、どの行動が大人に反応を起こさせているのかを子どもに気付かせる。

【後期：6か月～10か月】

④ 次に起こることの予測が立つようになる。そこで、フォーマットを使ったやり取り遊びを設定する。そのとき、遊びの始まりと終わりを明確にし、今、何をして遊んでいるのか、次に何が起きるのかを理解させる。

フォーマットとは、「いないいないばー遊び」にみられる「大人がタオルに隠れるー現れる」というような一定の遊びの型である。フォーマットを意識しながら繰り返し遊ぶ中で、遊びを十分楽しませ、遊びの流れを理解させる。

⑤ 意図的伝達につながるような行動が見られ始めたら、それに確実に反応を返す(「意図付け」と呼ぶ)。

大人に向かって「あー」と声を出したときに、視線を合わせながら「『あー』と言ったの。おもしろかったね。」と言葉掛けしたり、子どもが手を伸ばしてきたときに手を握り返したりするなど、意図的伝達につながる行動が見られたとき、大人がそれを見逃さずに反応していくことで、大人に伝わったことを理解させる。

4 意図的伝達段階の子ども

(1) 特徴 (10か月～1歳頃)

視線や発声を伴う行為によって意図を伝えられる段階

子どもは8か月を過ぎる頃から三項関係の理解が進む（例えば、①自分、②自分の欲しいもの、③母親という三つの関係に気付き、近くにあるボールを取ってほしいときに、母親を見てそれを伝えるようになること）。また、10か月頃には、手段－目的関係が分かるようになる。このような聞き手効果段階後期の認知の発達を背景に、コミュニケーションも大きく変わる。例えば、母親に視線を向けて、「あっ、あっ」と発声して注意喚起をし、指さしなどでやってほしいことを要求するように、自分の意図を、視線や発声を伴う行為によって、はっきりと大人に伝えられるようになってくる（図1）。

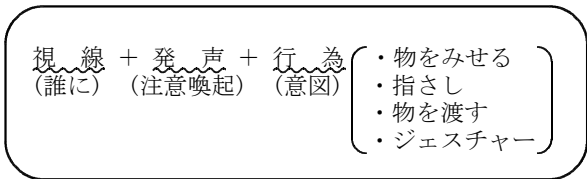


図1 意図的伝達段階の伝達手段 2)

(2) 関わりのポイント

この段階では、子どもが発声や指さしなどの伝達手段を使って、コミュニケーションを開始することと、主導権をもって大人と遊ぶために、遊びの内容や方法、流れなどの遊びについての知識を育てることをねらいとする。

① 遊びは、やり取り遊びや物を使った遊びを設定する。

積木やボール、車など、物を介した遊びが楽しめるようになる。遊びの中で、誰に、何を、どうしてほしい、などの要求を、自分もつ伝達手段で伝える場面を設定し、それに大人が応えることで、意図が実現する経験を多くもたせる。

② 子どもが遊びを楽しめるようになり、始まりと終わりが分かってきたら、子どもが伝達するチャンス（場面）を設定する。

この段階においても簡単なフォーマットの活用が有効である。フォーマットを意識しながら、遊びの途中や終わりで間をつくり、子どもが自分から伝達手段を使って伝えてくる場面を設定する。このことで、子ども自身が遊びを始められることに気付けるようにする。子どもが始められないときは、大人が伝達手段のモデルを示すことも大切である。

5 インリアルを取り入れた実践例

聞き手効果段階後期から意図的伝達段階にあるA児（特別支援学校 小学部2年）への取組を、以下に述べる。

(1) 実態

<対人関係、コミュニケーション面>

- ・ 教師が遊びに誘うと歌遊びをまねたり、遊具に乗ってうれしそうに笑ったりする。
- ・ 話し言葉（一語文）はあるが、独り言のようにつぶやくことがほとんどで、自分から教師や友達に言葉を発する、物を見せる、手を引くなどのやり取りの開始は、ほとんど見られない。

<認知・操作面>

- ・ 手段－目的関係が分かる（例 CDプレーヤーのこのボタンを押すと音が出るということが分かる）。
- ・ 「はさみ」や「のり」など身近な物の名前を聞いて指さすことができる。
- ・ 簡単な身振りをまねることができる。

(2) コミュニケーションの目標

- ① 教師を意識し、関わって遊ぶ。
- ② 自分から教師に向かって、言葉や身振りで伝達する。

(3) 指導の経過

本児は、人に向かって、自分から言葉などで伝えようとする力が弱いことから、相手を意識するようなやり取りが含まれる「歌遊び」や「かくれんぼ遊び」、

「トランポリン遊び」などを設定した。次に、トランポリン遊びのフォーマットによる指導の経過を紹介する。

<指導期間>

3学期（週1時間：自立活動の時間における指導において、毎時間10～15分間設定）

<指導上の留意点>

- 本児に分かりやすいように、ゆっくりと一語文で話し掛けたり、指さしや身振りを取り入れながら話したりする。
- 簡単なフォーマットを設定して遊ぶ。そして、遊びの最後に、「1、2、3」と言いながら大きく跳び、「ドスン」という掛け声と共にトランポリンに座り込むという遊びの山場をつくる。
- 遊びの流れが分かるまでは、待ち時間をとらずにフォーマットを何度も開始し、遊びを楽しませる。

① 【前期フォーマット】

<A児>	<教師>
トランポリンの上 に立ち上がる	→ 歌いながら跳ぶ ✓
教師と一緒に跳ぶ	→ 歌の終わりで止める

本児がトランポリンに立ち上がった後、教師が歌を歌いながらトランポリンを跳び始め、本児も一緒に跳ぶというフォーマット（前期フォーマット）を設定した。

本児は歌やトランポリンの揺れが始まるとすぐに笑顔になり、歌の最後でトランポリンに座り込む部分が特に楽しい様子で、「ドスン」と言葉も発していた。遊びの流れはすぐに理解することができた。

そこで、本児の動きに合わせてトランポリンを跳び、一緒に笑ったり、「ドスン」、「すごーい」など言葉掛けしたりしながら、トランポリン遊びを十分楽しませた。

② 【中期フォーマット】

<A児>	<教師>
教師をじっと見て 待つ	→ 「もう1回」と人さし指を立てて差し出す ✓
教師の指を握る	→ 「もう1回」と言葉掛けし、歌いながら跳ぶ ✓
教師と一緒に跳ぶ	→ 歌の終わりで止める

その後、一つのフォーマットの終わりに、すぐにその遊びを始めずに、本児の反応を少し待つてみることにした。すると、本児は教師をじっと見て待っているような様子が見られた。

そこで、教師が、「もう1回」と言いながら人さし指を立てて差し出すと、本児はその指を握ってきた。それに対して教師は、「もう1回」と言葉掛けして、遊びを開始するようにした（中期フォーマット）。

③ 【後期フォーマット】

<A児>	<教師>
教師に人さし指を 差し出す	→ 「もう1回」と言葉掛けし、歌いながら跳ぶ ✓
教師と一緒に跳ぶ	→ 歌の終わりで止める

しばらく中期のフォーマットを繰り返すと、本児は自分から人さし指を立てて教師に差し出してくるようになった。そこで、教師は、本児の人さし指を握り「もう1回」と言葉掛けして、遊びを始めるようにした（後期フォーマット）。

その後、本児は、自分から「もう1回」と言いながら教師に人さし指を差し出して、遊びの開始を伝えてくるようになった。

(4) 評価

本児の表情や言葉、動きなどに反応的に関わることで、「もっとしたい」という思いをもたせ、本児の反応に合わせてフォーマットを変化させていく中で、伝達手段を引き出していくことができた。

コミュニケーションの初期の段階にある子どもとの関わりでは、教師は、子どもの視線や発声、体の動きなどをよく観察し、子どもの意図を感じ取りながら、快反応を引き起こすやり取りを見付けることが大切である。そして、やり取りの中で、子どもの伝達手段を最大限に引き出していくことが求められる。

その過程では、教師と子どもが、「楽しい」、

「もっとやりたい」と共に感じ合える関係であることを大切にしたい。特に、聞き手効果段階では、教師の思い込みや一方的な解釈にならないよう、子どもの様子や教師の関わりを常に見直していくことが重要である。また、フォーマットに教師がとらわれ過ぎて、子どもの意図に気付かないこともありうる。教師のコミュニケーション感度を高くした子どもとの関わり合いが求められる。

ー引用・参考文献ー

- 1) 竹田契一監修、里見恵子他著『実践インリアル・アプローチ事例集』平成17年 日本文化科学社 P 23
- 2) 上掲載 P 27
 - 竹田契一、里見恵子著『インリアル・アプローチ』平成6年 日本文化科学社
 - 坂口しおり著『コミュニケーション支援の世界』平成18年 ジアース教育新社

(特別支援教育研修課)